

ふるさと交友録

～伊藤 公平～ 7

「ふるさと」には、いろいろなひとがいる。この「交友録」では、月1回のペースで公平さんの“大切なひとびと”を紹介していただきます。



伊藤公平(いとうこうへい)北見市在住、郷土史研究者。私設図書館「麦の風文庫」と「野草苑があでんきたみ」主宰。平成13年～20年、みんとに「ふるさと四方山話」「ふるさと・そぞろ歩る記」を連載。

オサムの家を思い出しての、ミルクいちご

薬屋さんの息子で六十年余以来の友オサムの家のことを書くつもりが思いきり脱線してしまった。

以前に、私には「母さん」と呼ぶ人が三人いると書いた。その一人がオサムの母さんである。

私の家は農家だったので、たとえば出面さん(農作業の手伝い人)たちの休憩時間の茶菓子は、どちらかと言うと質よりも実、どっさり山盛りが普通だったので、買う時も斗缶(容量十八リットルの四角いブリキ缶)入りの南部煎餅とかカリントウなどである。手づかみ、わしづかみが日常だった。

オサムの家のおやつは色紙のセロファンにくるまっていた。こんなお菓子もあるのと正直おどろいた。包みを丁寧にひろげて破れないようにシワを伸して、大切に持ち帰って本にはさんで宝物にした。

イチゴの時期には、ヘタを取り、小皿に盛ってコンデンスミルクをかけてくれ

た。小さなフォークもついていた。イチゴはもとよりトマトにしろアジウリにしろ、畑でもぎたてを、少しくらい泥がついていても、その場でかぶりつくのが当たり前前だった百姓の子にとって、それはイチゴとは全く別の豪華な菓子にもみえた。

パンも、そうだった。当時、北斗高校の前あたりにアラキというパン屋さんがあって、そこで母が買ってくれるのは焼け色のつきすぎたあんパンとか、三角ジャムパンのはしっこ、安く売ってくれたそんなパンだったから、オサムの母さんの焼いた、きつね色で丸々とした、ふんわりほんわりのまだ暖かみの残るパンは、食べるのがおしいほどだった。

薯でも南瓜でも唐黍でも、大きな鉄鍋でどかんとゆでる豪快さにオサムたちは驚いたかもしれないが、逆に私はオサムの家のそれらに、私の知らない世界のあることを思いつきり知らされた。これをカルチャーショックというのだろうか。とあとで思った。